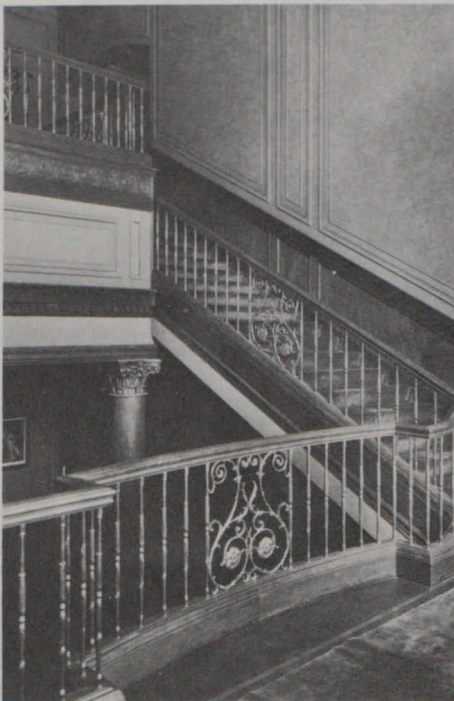


公使公邸の内部。



その夏、幾度となく、首相からつとに認められていたキーンリーサイドの手腕が実際に試されることに

が、マラーが任命されてからわずか六週間後のことだった。四年後に建てられた本格的な公使館建物の特徴が、このプランの中にはすでに多く見られるのである。マラーはさらに、公使館用の土地の購入と恒久的な建物建設のために、次期国家予算に十分な資金をとってはほしいと首相に申し入れた。

キング首相は、つねづねマラーの提案には心よく応じていた。特にロンドンとパリへの訪問、東京へ向かう途中の国内遊説、初秋に日本へ到着する計画などは喜んで承認した。しかし恒久的施設の入手を即刻行なってほしいとの要求に対しては、これを承認しようとはしなかった。最初のうちは借家を利用するようにマラーに勧めたのだった。マラーは、当面、それで満足することにした。

受入れ準備にキーンリーサイド氏

次期公使がヨーロッパとカナダ国内を忙しく跳び回っている間、カナダ政府は公使一行の受入れ準備を整えるために、ヒュー・キーンリーサイド博士を東京へ派遣した。キーンリーサイドは、当時若冠三十歳。大学の優秀な教師として名が高かったが、一年前に外務省に迎えられたばかりだった。その短期間に、彼は「政治状況についての豊かな知識と、自己を表現する術ならびに判断力をもつ素晴らしい人物」として首相の眼にとまっていた。キーンリーサイドは、一九二九年の夏の初めに日本に到着し、直ちに適当な公使館の敷地や公邸の獲得に奔走し始めた。公使館業務は第五永井ビルでとることに



公邸内部。

し、かなり苦労してやっとなり麻布区西町に旧ルーマニア公使邸だったという屋敷を、マラーの住まいとして借りることができた。

マラー公使の着任

一九二九年九月九日、キーンリーサイドは、英国大使館の代表や在日カナダ人、多くの報道陣などと共に、横浜の埠頭に立っていた。その時、汽船「エンブレス・オブ・フランス」が、マラー一行を乗せて静かに到着した。演説のチャンスを決して逃がさないマラーは、歓迎陣の前で簡単に挨拶の言葉を述べた後、車で仮宿舎の帝国ホテルへと出発した。

新任公使は早速、時の外務大臣（前駐米大使でもあった）幣原喜重郎男爵（一八七二—一九五一）に会見を求め、カナダ政府からの挨拶状を手渡すと同時に、天皇への信任状提出はいつになるのかと尋ねた。九月十六日になって返事が届き、

翌十七日に接見を許すという。あまりに急なことにマラーは少なからず興奮したが、翌朝にはすでに用意万端整えられ、彼は若き天皇に信任状を提出するため、カナダ国旗と日章旗で飾りたてられた帝国ホテルを後にしたのだった。

着任早々から、公使とスタッフは厳格かつ精力的に仕事を進めていった。公使が特に責任を感じていたのは、オタワに送るための日本についての詳細な情報を収集することであった。日本はカナダ国民の大半にとって全く未知の国だが、カナダにとって計り知れぬほど大きな可能性を秘めた国である。長大かつ詳細な報告が毎月、本国へ送られた。日本の政治経済についてだけでなく、中国の情報もそこには含まれていた。二等書記官のK・P・カーウッドが北日本各地を回り、



大阪朝日新聞社で。